様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０３３７７

研究課題名（和文）戦前の社会主義思想と検閲―テキストの生成・流通と検閲に関する基礎的研究―

研究課題名（英文）A Study on Censorship of Publications of Socialism before World War II

研究代表者
久保　誠二郎（KUBO, SEIJIRO）

東北大学・経済学研究科・博士研究員

研究者番号：８０４００２１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前日本でのマルクス主義の普及史（受容史）研究の一環として、出版と検閲に着眼して研究をすすめた。内務省『出版警察報』及び実際に検閲の際に使用された「検閲正本」等の当時の秘密資料を用いて、マルクス主義に関する出版物とその検閲の実態の一端を明らかにしようとした。具体的には、当時の出版物に対する発禁等の処分の実効性を表す「差押え率」の調査とデータベース化をすすめ、また「検閲正本」に残る検閲官による書き込み等の検閲の痕跡の調査を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「危険思想」とされたマルクス主義の出版とそれへの検閲には、その思想の普及の意図に対して、それを阻止しようとする権力との攻防も表現される。戦前の一時期には、発禁となっても実際には流通していた事実があったが、従来、そうした検閲処分の実効性や流通実態は、当事者の「回想」で語られることがほとんどだった。本研究は、内務省資料に依りながら、その実態を（一部ではあるが）数値で明らかにしようとする。この点に研究史上の意義がある。
また、検閲時の痕跡が残されている「検閲正本」の調査により、これまで不明であった検閲過程を具体的に追跡することが可能となる。本研究はその基礎調査をすすめた。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on publication and censorship, as a part of research of the prevalence of Marxism (and the history of its acceptance) in prewar Japan. The author has tried to clarify the actual situation of the publication about Marxism and the censorship on it by using secret materials at that time, such as "Shuppann Keisatu Hou (The police report on the publication)" by the Ministry of Interior and "Ken-etu Seihon", copy books offered by publishers that were actually used when the authority censored them. Specifically, the author has conducted investigation on the “Seizure rate” that shows the effectiveness of the prohibition of publications at that time and then has made a database, and, at the same time, has advanced the study of the traces of censorship such as comments left by censors on the margin of copy books for “Ken-etu Seihon”.

研究分野：マルクス主義普及史（受容史）、社会思想

キーワード：マルクス主義の普及史/受容史　検閲　社会主義思想　戦前期日本　発禁

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、戦前（本稿では 1920 年代から 30 年代前半の大正・昭和初期を指す）における我が国でのマルクス主義の受容を「出版」に着目して研究を進めてきた。この観点からいえば、細川嘉六編『日本社会主義文献解説』(1932 年及び戦後版)などの従来の文献目録は、主要な文献しか採録しておらず、戦前に刊行されたマルクス主義出版物の全体像を明らかにしない。そこで独自に網羅的な目録作成に取り組み、約 1800 点（単行本類のみ）にのぼるリストを作成した[i]。このリストには戦前のマルクス主義の隆盛が示されており、学術的な文献だけでなく、例えば樋口麗陽『誰にもわかるマルクス資本論』（日本書院、1919 年）、マルクス書房編『マルクス学教科書』1930 年（旧ソ連の文献の翻訳出版）など、様々な啓蒙的文献が含まれている。学術研究であれば許容された印象のある戦前のマルクス主義だが、その出版は学術出版に限られず多様であることが明確になった。しかし、こうしたマルクス主義の出版の隆盛の一方で、当時は検閲体制下にあり、その出版には発禁（発売頒布禁止処分）等の処分が多々課されたはずである。そこで関連研究の調査を進めた結果、検閲研究（出版史・文学史）には未開拓な領域があり、近年になって進展していることを把握した。その中の先駆的な研究[ii]から、次の二つの資料の意義を見出した。

一つには『出版警察報』（内務省秘密資料）である。戦前の一時期には発禁の実効性が不十分で、発禁書が市中に流通したことがあった。それは回想で語られてきた事実だが、実態が明瞭に判明するわけではない。この資料にはその実態を明らかにする発行部数と差押え部数の記載が一部にあり、タイトルごとに数値で判明する。

二つには「検閲正本」である。当時、すべての出版物は内務省に納本する義務があり、検閲を受けた。その検閲に使用された出版物が「検閲正本」であり、検閲官による禁止箇所のチェックや書き込みなど、検閲の痕跡が生々しく残されている。当時、テキストのどこが検閲に抵触したのかは原則として非公開であり、およそわかっていない。しかし、「検閲正本」はそれを明らかにしうる。

管見の限り、マルクス主義普及史研究において「検閲正本」及び『出版警察報』研究はほとんどないに等しい。

そこで、これらの資料の調査を進めて当時のマルクス主義の普及（受容）と検閲との関係をより明らかにすべく、本研究課題を着想するに至った。

それはまた、戦前のマルクス主義の受容を、検閲下での著者とテキストとの関係（自己規制や改変）や出版物と読者との関係（検閲処分による差押さえ）といった「テキストの生成・流通」といった観点から改めて捉え直すことを可能とするように思われる。

2. 研究の目的

本研究課題は次のようにテキストの検閲過程およびテキストの流通実態に関する基礎的な知見の蓄積を主眼とする。

(1) 検閲過程の基礎的解明とデータベース化

社会主義文献の「検閲正本」を調査し、禁止箇所の特定、検閲官のコメントや処分意見の解読を進める。

(2) 社会主義文献の流通状況の基礎的解明とデータベース化

『出版警察報』(1928 年から 1944 年)に基づき、社会主義文献の発行部数・差押え部数、またタイトルごとの具体的な禁止理由のデータベース化をすすめる。

(3) 検閲によるテキストの変容比較

発禁となった初版に修正を施し、改訂版として出版されたケースがある。これらのテキスト比較を行う。

3. 研究の方法

国立国会図書館及び米国議会図書館所蔵の「検閲正本」を調査し、検閲の痕跡のデータベース化に取り組む。『出版警察報』を用いて、そこに記載された発行部数と差押え部数から発禁等の処分の実効性（差押え率）をデータベース化する。また具体的な禁止理由の調査に取り組む。

4. 研究成果

(1) 主な成果は上記「研究の目的」の「(2) 社会主義文献の流通状況の基礎的解明とデータベース化」である。タイトルごとの発行部数と差押え部数、差押え率を抽出（算出）することにより、1928 年から 1942 年までの出版物のうち、発禁（発売頒布禁止処分）や削除処分など、検閲により処分を受けた出版物に対する差押えの実効性を、すべてではないものの、ある程度まで明らかにしうるデータベースを作成した。以下に概要を示したい。

① 差押えの実効性に関するデータベースの概要

単行本で 1623 点、雑誌・新聞で約 7 千点を収録する。発行年（または禁止年）は 1928 年から 1942 年のものである。データの典拠は、内務省秘密資料『出版警察報』(1928 年－1944 年）に掲載された（主に）「主要禁止出版物差押成績表」（以下、「差押成績表」）であり、そこから発行部数（「差押え成績表」には「印刷部数」とあるが「発行部数」と記す）と差押え部数の記載があるものを抽出した。マルクス主義関連の出版物に限定せず、「差押成績表」に掲載されたすべての出版物を対象とした。

項目は「タイトル」「発行年月日」「禁止年月日」「発行(印刷)部数」「差押え部数」「差押え率(『出版警察報』記載)」「差押え率(算出)」「安寧/風俗」(記載がない場合もある)、また補足的なメモから成る。これらを Microsoft Excel で作成した。

ただし、単行本では書誌不明や調査中のものおよび大本教関連の一部は除いている。それら除いたものは約 300 点である。可能な範囲で国立国会図書館 NDLOPAC 等を利用してタイトルや出版社を確認し修正を加えたものもあるが、すべてではない。「差押え率」項目が二つあるのは、『出版警察報』に「差押え率」が記載されることもあればない場合もあること、また記載された「差押え率」に間違いもあることから、発行部数と差押え部数から算出したものを項目として加えている。なお「差押え率」は「差押え部数」を「発行部数」で除したものである。

作成にあたって、『雑誌新聞発行部数事典』[iii]の収載データと解説を参考にした。本データベースは当該事典が採録していない「差押え部数」と「差押え率」を補う意義をもつものである。

② 分析の概要(試論)

単行本を対象に、いくつかの分析の概要を試論として以下に示しておきたい。ただし、次の諸点に留意すべきである。

- これらのデータは「主要禁止出版物差押成績表」に基づくものであり、あくまでも取り締まる側が「主要」なものと判断した出版物のデータに限られる。つまり、処分された出版物全体に基づくデータではない。とはいえ、取り締まる側が「主要」なものと判断した出版物のデータであることに、このデータベースの独自の意義があろう。
- 「差押成績表」にタイトルは記載されたものの発行部数等のデータがないケース、差押え部数の記載のみのケースも多くある。これらはデータベースに採録できない。
- 差押え率が判明するタイトルや時期は限定的であり、特にマルクス主義関連の出版物の盛衰の全体(1920 年代から 1930 年代前半)のすべてをカバーできず、その一部に過ぎない。
- 調査中などの理由で除外したデータがある点でも完全ではない。
- 「差押成績表」中の「差押え部数」が空白なり「-」については「0」として集計した。また「風俗/安寧」の区別なく集計した。

表1:単行本 1623 点全体の概要

	タイトル数	発行部数(合計)	差押え部数(合計)	差押え率(単純平均)	差押え率(加重平均)
1928	4	14,996	5,071	57.4%	33.8%
1929	0	0	0	-	-
1930	106	472,615	207,479	39.1%	43.9%
1931	78	124,258	48,413	35.2%	39.0%
1932	0	0	0	-	-
1933	49	154,957	69,665	42.8%	45.0%
1934	80	108,249	45,956	42.7%	42.5%
1935	77	145,334	57,847	47.8%	39.8%
1936	308	865,204	504,919	56.2%	58.4%
1937	187	313,084	149,928	50.2%	47.9%
1938	108	219,272	124,487	52.5%	56.8%
1939	174	1,258,760	245,699	45.8%	19.5%
1940	145	851,078	178,271	40.9%	20.9%
1941	274	2,203,327	1,059,073	42.1%	48.1%
1942	33	82,666	38,270	48.3%	46.3%
合計	1,623	6,813,800	2,735,078	46.2%	40.1%

表1は作成したデータベースの単行本全体について集計したものである。1929 年と 1932 年は発行部数と差押え部数のデータがないため示せない。表にある二つの「差押え率」は、タイトルごとに筆者が算出した「差押え率」を使用して、年ごとにその単純平均(タイトルごとの差押え率を加算しタイトル数で除したもの)と、加重平均(「差押え部数の合計」を「発行部数の合計」で除したもの)を示したものである。

1939 年と 1940 年の単純平均と加重平均が乖離しているのは、発行時点では問題なしとされた出版物が後年になって禁止されたケース(「失期処分」)の影響とみられる。例えば 1939 年 4 月 26 日に禁止された『現代日本文学全集　武者小路実篤集』(改造社)は、「差押え成績表」には 1927 年 11 月 5 日の発行、発行部数は 348,486 部、差押え部数は 599 部とあり、差押え率は 0.17%と極端に低い数値になっている。この発行部数は累積の数値であろう。1940 年についても同様の理由と推測している。こうした失期処分の影響も考慮してこの表を見る必要がある。

表2:左翼的な出版物の「差押え率」

	タイトル数	発行部数（合計）	差押え部数（合計）	差押え率（単純平均）	差押え率（加重平均）
1928	0	0	0	−	−
1929	0	0	0	−	−
1930	74	146,788	53,632	39.6%	36.5%
1931	61	80,168	25,934	33.5%	32.3%
1932	0	0	0	−	−
1933	6	4,700	1,195	40.3%	25.4%
1934	8	5,217	1,831	33.7%	35.1%
1935	6	5,100	2,558	48.2%	50.2%
1936	13	9,751	5,678	54.1%	58.2%
1937	6	9,027	4,333	38.9%	48.0%
1938	2	2,017	444	22.0%	22.0%
1939	0	0	0	−	−
	176	262,768	95,605	38.8%	36.4%

表2は、タイトル等から左翼的な出版物と筆者がみなしたものを抽出した表である。マルクス主義関連の出版物に限定していない。左翼系の出版では、出版側が差押えを逃れる方策をとることもあったため、その影響を見出せるかもしれないと考えて試論的に作成した。表1と比較して、差押さえ率が低い年も高い年もある。抽出したタイトルの妥当性やその他の影響を十分に吟味できておらず、ここで確定的なことは言えない。今後、さらに検討をすすめたい。

表3:出版社ごとの「差押え率」

表2に関連した問題意識で、データベースから左翼系の出版物を手掛けた出版社ごとの「差押え率」を抽出してみた。紙幅の都合から年ごとの集計は省略し、出版社ごとのタイトル数、発行部数、差押え部数、差押え率(加重平均)を記しておこう。

白揚社:27 タイトル、23,390 部、7,818 部、33.4%
希望閣:19 タイトル、25,850 部、7,568 部、29.3%
ナウカ社:14 タイトル、13,303 部、6,337 部、47.6%
南蛮書房:11 タイトル、26,000 部、5,273 部、20.3%
マルクス書房:6 タイトル、7,500 部、4,799 部、64%

ちなみに改造社は 7 タイトル、367,986 部、7,953 部、2.2%と差押え率が極端に低い数値になるが、これは上述した 1939 年の失期処分の影響である。1939 年の失期処分(発行部数 348,486、差押え部数 599 部)を除くと、発行部数 19,500 部、差押え部数 7,354 部、差押え率 37.7%となる。

こうした数値は客観的なものとして有用であるが、個々のタイトルごとの具体的な背景をも加味する必要があり、数値だけに着目することは避けたい。さらなる検討が必要である。

この他にも、「差押え率」が判明する個々のタイトルに着目することも可能である[iv]。管見の限り、こうしたデータベースはこれまで作成されなかったものであり、マルクス主義関連の出版物のみならず、当時の検閲下での処分の実効性、出版物の流通実態を把握するうえで有用であろうと思われる。

（2）「検閲正本」の調査

「検閲正本」の現在の所蔵は、国立国会図書館と米国議会図書館とに分置されている。研究当初は知りえない事情であったが、米国議会図書館所蔵分がデジタル画像で国立国会図書館ホームページにて「内務省検閲発禁図書」として 2017 年に公開されることになった。これまで利用しにくかった貴重な資料が鮮明なカラー画像で利用できるようになったことを受け、「検閲正本」のうち、主に米国議会図書館所蔵分の調査を進めた。約 1300 点の資料のうち、タイトル等からマルクス主義や左翼系出版物と思われるものを 500 点ほど抽出し、検閲官の書き込み等の検閲の痕跡の調査をすすめた。この「内務省検閲発禁図書」には、当然ではあるが、「検閲正本」と、実際の検閲作業には使用されなかった「検閲副本」の両者が入り混じっている。また、検閲の痕跡の多さは資料によって大きく異なる。興味深い痕跡の一例を挙げておきたい。

『プロレタリア経済学の方法論』（アー・コーン著、村田正訳、叢文閣、1929 年 10 月 6 日発行）の「検閲正本」（書誌 ID：28046359）には、表紙の左側に「安寧不問」印があり、その下に「4.10.8」（栗原）とある。中央に「内務省　4.10.-5　正本」印、右側に「調査済」印があり、その下に「昭和四年十一月廿八日」印がある。（後者の日付は他のものと 1 か月以上離れているが、その理由は未調査である）

「安寧不問」印があるため、検閲の結果は「不問」（処分なし）とされたものと見受けられる。ところがページをめくっていくと「永久保存」印の後のページに次の禁止意見が記されている。（「/」は改行）

「本書ハ/プロレタリヤ経済学ハプロレタリヤノ革命ノ為ノ斗争/ノ武器ナリヲ以テプロレタリヤハ資本主義社会ヲ破壊スル/為、資本主義社会ノ機構ノ理解ニ努ムヘキナリトプロレタリ/ヤ革命ヲ煽動シ居レリ/禁止可然哉」

結果として、この禁止意見は覆されたということだろうか。『出版警察報』（14-16 号（1929 年 11 月-1930 年 1 月））を見ても禁止処分を受けた旨の記述を見いだせない。

こうしたケースや逆のケース（「不問」から「禁止」）もある。痕跡がほとんどないものも多い。端緒的な範囲にとどまるが、約 500 点の出版物について検閲の痕跡の有無などの基礎的な調査をおこなった。

（3）台湾での日本語のマルクス主義出版物の調査

当初の計画にはなかったが、戦前日本のマルクス主義普及史研究を出版に着目して進めていく上で、日本の影響下にあった朝鮮半島や中国、台湾における当時の日本語のマルクス主義の出版物の流通状況を把握する必要があるとの認識に至り、端緒的な調査として台湾での所蔵調査をおこなった。

旧台北帝国大学図書館、旧台北高等商業学校の蔵書が国立台湾大学に所蔵されており、そのなかに諸種の日本語マルクス主義出版物も見出された。興味深い資料では『国家と革命』(レーニン、司法省刑事局訳)があった。マル秘の印、「取扱注意 No.33」との印があり、台北帝大図書館の蔵書印が残されている。少なくとも 33 部は印刷されたのであろうが、管見の限り、国内では 3 つの図書館にしか所蔵されていない。『国家と革命』はマルクス主義を代表する文献のひとつであり、取り締まり用に配布されたのかもしれない。この経緯の調査も今後の課題である。

終りに

全体として、研究目的の（1）（2）について、データベースの作成と基礎資料の収集はできたものの、何らかの結論を得るには至っていない。また目的の（3）に取り組む余力はほとんどなかった。残された課題には今後も取り組んでいきたい。

---

[i] 久保誠二郎編「マルクス主義関連文献」、URL http://www.ric.hi-ho.ne.jp/jlme/

[ii] 浅岡邦雄「戦前期内務省における出版検閲」（『大学図書館問題研究会誌』、2009）、千代田区立千代田図書館編『千代田区立図書館蔵「内務省委託本」関係資料集』(2011)

[iii] 『雑誌新聞発行部数事典』（小林昌樹編・解説、金沢文圃閣、2011 年）

[iv] 拙稿「『共産党宣言』は人々の手に渡ったか―昭和初期の事例の考察―」（研究年報「経済学」（東北大学）７４（１）、2014 年）で若干試みた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 久保　誠二郎	４．巻 Vol.52 No.9　通巻596号
２．論文標題 日本における『資本論』像	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本の科学者	６．最初と最後の頁 480-485
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

久保誠二郎（研究代表者）
・講演「出版からみる日本のマルクス主義受容史」（通訳付き）、2018年10月18日、武漢大学（中国）
・下記の研究代表者のサイトで研究成果の一部を公表していく予定である。
「戦前日本のマルクス主義文献」http://www.ric.hi-ho.ne.jp/jlme/

吉川圭太（研究分担者）による関連業績は以下である。
・吉田裕・森武麿・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』、吉川弘文館、pp.71,77-78,122,250,254-255,266-267,318-319,393,396,650-651,669、2015年
・広島市立大学広島平和研究所編『平和と安全保障を考える事典』、法律文化社、p.271,328、2016年

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉川　圭太 (YOSHIKAWA KEITA) (80645408)	神戸大学・人文学研究科・特命講師 (14501)	
研究協力者	小林　昌樹 (KOBAYASHI MASAKI)		国立国会図書館